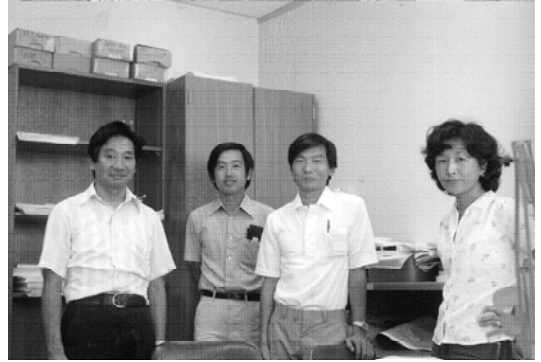


颯爽としていた 菊地さん

川崎一朗

京都大学防災研究所



私が菊地さんのことを知ったのはいつ頃だったろうか。確か昭和43年(1968)か44年(1969)、互いに地球物理学科の3年生と4年生であった頃だと思う。しかし、当時は、私より学年が1つ下の菊地さんとのことはそれほどは知らなかった。

最初に菊地さんのことを強烈に意識したのは、菊地さんと竹内均先生との共著、Griffth (1920)の理論と Kostrov (1966)の理論を発展させた「SH型割れ目の伝搬について」が、昭和45年(1970)、「地震」第23巻に発表されたときであった。理学部3号館の廊下ですれ違った菊地さんは颯爽としていた。そのときに頂いた別刷り表紙の「川崎様」のいささか子供っぽい筆跡が私に30数年前の菊地さんを鮮烈に思い出させる。

昭和48年(1973)、菊地さんは結婚してさっさと横浜市大に就職してしまった。その5年後(1978)、私は、出来たばかりの富山大学地球科学教室に就職した。その後は、お互いに地方大学の研究者として東大大型計算機センターでばったり会うことが多い関係になった。

1979年、菊地さんは、ポスドクとしてシカゴ大学の Wertman 先生の所に招かれた。「クラック伝搬の仕事をするのに理想的な場所なんだろうなあ」と思ったことを覚えている。

1979年の夏から1980年の夏まで、私は、MITの安芸先生の元での1年間のポスドク生活を送った。日本に帰る途中、私はカリフォルニア工科大学の金森先生の元を訪ねた。ここでは、シカゴ大学での1年の後、もう1年をここで過ごしていた菊地さんと、1975年前後に日本を離れてUCLAでの研究生生活を送っていた田島文子さん(現広島

大学理学研究科)が迎えてくれた。写真は、その時、金森先生の研究室で撮ったものである。このときも、菊地さんは若々しかった。

菊地さんはクラック伝搬の研究を継続しているものと予想していたら、「地震の多重震源解析をしてるんですよ」と言われたのを記憶している。今から思えば、菊地さんのその後のアスペリティマッピングに至る研究の発芽期であったのだろう。

その後、私は、海洋上部マントルの異方性の研究からゆっくり地震の研究に進んだ。お互いの研究がそっぽの方向に進み、何となく話しをする機会も少なくなった。

お互いが、富士山を逆の方向から見ていることに突然気がついたのは数年前であろうか。それは、「プレート境界上のゆっくり地震のすべり域とアスペリティが空間的に棲み分けている」ことが分かったときであった。

地震予知とは「早期発見された震源核のその後の成長過程を、プレート境界面上の摩擦強度分布を境界条件に、断層摩擦の物理法則に基づく数値シミュレーションによって予測すること」であろう。プレート境界型巨大地震の地震予知にせよ、強震動予測にせよ、「地震アスペリティとゆっくり地震のマッピングでプレート境界を埋め尽くす」ことが出来れば、最後のボトルネックをクリアしたことになるはずである。私たちは、その問題を逆の方向から攻めていたと言えるだろう。あと5年、互いにこの研究を進めていたらどうなっているだろうかとふと思う。

だが、そんなことを考えても詮がない。いまはただ遠くから静かに菊地さんの冥福を祈りたい。月刊地球号外45号 特集 菊地正幸教授, 60, 2004